

読書

社会への反骨 脈打つ

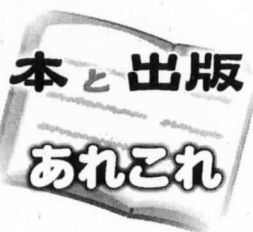
雑誌「arc」創刊10周年



「母方の親戚が長岡にいる」という東郷禮子編集長。「主張が自己完結ではないけない。自分のスタンスだけ決めてやりたいことだけやるのはジャーナリストとして力不足」川崎市の出版社「レイライン」

売れ筋にない愚直さ

さん…これまでのインタビューからは、各人のイメージや枠を超えた義憤や決意が伝わってくる。「信念に基づいて一生懸命活動している魂を、一つ一つ、社会や世界とシンクロさせたい」と熱く語る。



川崎市の小さな出版社「レイライン」が発行する雑誌「arc(アーク)」が、創刊10周年を迎えた。さまざまな分野の「時の人」へのロングインタビュー

しかし、世の中一般には「売れ筋」が前提の出版界。華々しい大衆娯楽にすっかり背を向けた姿勢のため、業界関係者から「対象の読者年齢層も定かでない、これでは売れません」と否定されたこともあるという。

編集長は「毎回3000部からの発行だけれど、こんな暗い世の中たまらない、という方々に読んでほしい。そんな方々の心がカチッと点火するような、そんな雑誌でありたい」と話した。

× ×

「本と出版 あれこれ」として、本にまつわる旬の話題や出版界の現状を、著者や業界関係者の話を交え、随時お送りします。掲載の際には「気になる一冊」など休みます。



雑誌「arc」の最新16号とバックナンバーの一部

東郷禮子編集長の自宅でもあるマンションの一室が「アトリエ」。スタッフはボランティアを含め数人だ。編集長は「あらゆることが混沌として

いる現代、漠然とした不安や無力感は毒ガスのように広がっている」と話す。脳科学者茂木健一郎さん、社会活動家湯浅誠さん、経済学者浜矩子